

＜ 今日の説教のポイント ルカによる福音書 23 章 1-5 節 ＞

1 イエス・キリストを殺したのはユダヤ人だけではない。

イエス様を殺したのはユダヤ人であると理解されがちです。ヨーロッパの長いユダヤ人差別の歴史はそのことから来ています。しかし、聖書は主イエスが最高法院とヘロデ王と共に異邦人の総督ピラトの前でも尋問され、ついにピラトによって死刑宣告が下されます(23:24)。使徒信条で個人名が出て来るのはマリア以外にピラトだけですが、その意味がこのことにあります。すなわち、神の子イエス・キリストを殺したのはユダヤ人だけではない、異邦人もまぎれもない当事者なのだと言いつつ表しているのです。ピラトは異邦人全ての者を代表しているのです。よって、私たちが使徒信条を告白する時、ピラトの名前を出すたびに考えなければならないことの一つは、私がイエス様を十字架につけて殺したのだということなのです。

2 「王であると認めるか」が問われていることが持つ意味。

ここで挙げられているイエス様を訴える罪状は、徹底して、「世を混乱させ、自分が王になろうとしている」という政治問題です(2,5 節)。それが総督が一番気にする問題だからです。しかし、ここで考えられている王の理解は捻じ曲げられています。イエス様はこの世の王になろうとされたのではなく、すでに神の国の王であり、それはいずれ到来するから、そのことを思ってこの世を生きる者となれと教えられたのです(使徒言行録 1:3-8)。政治問題は信仰者と関係ないのではないのです。神の国を見つめてこの世を生きる者らしい判断を下し、正義と公正が行われて行くように見守って行く責任がある問題なのです。

3 「何の罪も見出せない」とピラトが言ったことが持つ意味。

ピラトが「イエスに何の罪も見出せない」と言ったからといって、ピラトの罪を軽く見ていいわけではありません(責任回避という罪は重い。この問題はあらためて 13 節以下で)。しかし、ここではイエス様はその罪も含めてあらゆる仕打ちに黙って耐え、受け入れ、十字架の死に向かって下さったことの意味の大きさを考えておきたいと思えます。「キリストが地上で代わりに罰を受けて下さらなければ、私たちが無罪になることはあり得なかったことを思い起こすならば、主の受けた鎖を誇りとしても恥とはならないからである」(カルヴァン)。